

日本透析医学会のガイドラインを中心に、 高齢者の透析を考える

三浦靖彦[†]第73回国立病院総合医学会
(2019年11月9日 於 名古屋)

IRYO Vol. 75 No. 5 (392-395) 2021

要旨

増加の一途をたどる慢性透析患者は、国民全体と同様に高齢化してきている。透析を行いながら人生の最終段階を迎える患者だけでなく、透析非導入、または、透析中止（透析の見合わせ）を決定する患者も、米国のように、今後増加する可能性も考えられる。

高齢多死社会において、高度に発展した医療技術を、どのように適応するかについては、臨床倫理的アプローチが求められ、わが国においても臨床倫理が普及し始めているが、透析療法の適応においても、臨床倫理の四原則（自律尊重、無危害、善行、正義）を参照しながら、目の前にいる患者に何を提供すべきかを考える習慣を身につけたい。

近年、アドバンス・ケア・プランニングの概念が注目されているが、その前身である事前指示の普及も、透析医療の現場では、早くから行われていた。また、人生の最終段階を迎えた透析患者には、がん患者への対応と同様に、緩和ケア的アプローチが求められるが、透析現場において、緩和ケアのスキルは普及に至っていない。そこで、本稿では、透析の導入から中止に至るまでの倫理的問題点、透析患者への緩和ケア・エンドオブライフケアなどについて概説する。

キーワード 慢性腎不全、緩和ケア、臨床倫理、透析見合わせ、エンドオブライフケア

透析医療における臨床倫理的アプローチ

医療技術の革新と、患者の高齢化という問題が混在している現代において、医療の目標を「患者の生活の質（QOL）」に焦点を当てようという変革もあらわれたが、透析分野では、いち早くそれに対応し、透析患者のQOL測定用国際的質問紙も開発され、臨床応用されてきた¹⁾。

透析の導入から中止までのプロセスにおける臨床倫理的なアプローチを用いた意思決定支援のアルゴリズムを図1に紹介する²⁾。この意思決定の場面においては、「説明と同意」で表現されるような単調

なインフォームドコンセントではなく、共同意思決定（Shared Decision Making）と呼ばれるプロセスが求められる。ここでは、透析によって得られる患者の利益と、透析行うことによる患者の負担を両者でよく話し合うことが求められており、近年重要視されている「患者と家族の、ものがたり（ナラティブ）」を理解したうえでの意思決定支援が求められる。「利益を与え、害を与えるな」という臨床倫理の原則を念頭に置きながら、患者・家族との真摯な話し合いが求められる。

東京慈恵会医科大学附属柏病院 総合診療部 [†]医師

著者連絡先：三浦靖彦 東京慈恵会医科大学附属柏病院 総合診療部 〒277-8567 千葉県柏市柏下163-1

e-mail : yamiura-npr@umin.ac.jp

(2020年3月13日受付, 2020年11月13日受理)

How to Treat the Elderly Chronic Kidney Disease Patients Ethically

Yasuhiko Miura, Department of General Medicine, The Jikei University Kashiwa Hospital

(Received Mar. 13, 2020, Accepted Nov. 13, 2020)

Key Words : chronic kidney failure, palliative care, clinical ethics, withdrawal from dialysis, end of life care